

〔東寺百合文書に五十下至五十二上〕申起請文事

□元者於龍法師妻者爲不調不落□者之間於向後者且以不可有屋□出入音信許容之儀候万一猶有□通儀者堅可順御罪科若猶背□□旨申者可罷蒙□梵天帝釋下四大天王五道冥官太山□君日月星宿伊勢大神宮賀茂春日□尾梅宮祇園北野總六十餘州夫小神□當寺鎮守八幡三所稻荷五社伽藍□等御罰於助五郎之身者也仍起請□狀如件

寛正四年八月四日

助五郎 花押

〔太閤記八〕天正十一年城主定之事

或自宇喜田家運二代相續有し事は毛利右馬頭元就と秀吉卿と對陣有けるに宇喜田和泉守直家備後美作兩國を領し西輝元東秀吉其間に來て東西弓矢之行を見もし聞もし勤るに羽柴の家は興るべき方也とみて家老長船紀伊守戸川肥後守岡越前守花房助兵衛尉をよび寄相謀りけるは秀吉卿合戰之行國々之位置每物はかの行やうを察るに行々天下をも可計人なり此人に與し家運をさかへ忠功有人々の勞を補ひ萬民を撫育せんと思ふは如何にと密かに評しけるに西老奉り仰光にはおはしませども大切なる子供を人質に輝元へつかはしをきしなり殊に安心之儀をばいがおほし給ふぞやと申ければ予亦此事を悲しみつゝ其用捨骨髓に徹し謀りみるに今西に在人質は五人也兩國に在父母兄弟をかぞふれば百人に及べり五人を捨百人を助けんば國守之勤鬼神も悦給ふべし寔順當然之理諸人を撫するは君主之業なり所詮直家は順理可撫萬民もし此義をそむき正理を不知者は人質に付て西へ參候へ更以恨なし早いなやの返辭有べし送届くべしと有しかば皆直家に同じげりさらば誓紙を調へよとて熊野之牛主寶印を以始終の固をこしらへ秀吉卿へ小西如清をして其旨申奉りければ事の外悦びたまひつゝ其身の事は不及申於子孫も全疎意有まじきとの誓紙を蜂須賀彦右衛門尉につかは